

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
第65号 2009.8.27

発行
北海道ポーランド文化協会
〒011-0029
札幌市北区北29条西12丁目2
-16
佐光伸一
電話・FAX 011-727-1520

北海道ポーランド文化協会コンサートを終えて

演奏会実行委員会・薄井豊美

昨年、北海道ポーランド文化協会演奏部門として独立させていた
だいて初めての演奏会を、五月二
十九日、サンプラザホールで開催
させていただきました。今回の準
備には、安藤、薄井、小林、高
島、本田が当たりりましたが、ま
ず、演奏会の継続と、ポ文協の特
色を出すことを念頭に仕事を始め
ました。

去年は、ショパンとポーランド
人の作曲家に限ってプログラミン
グをしたのですが、曲目選択域を
狭くすると、いざれ行き詰ること
が考えられます。そんな考えか
ら、ショパンに関わる作曲家、
ポーランドに纏わる作曲家も含
む、としました。その結果、
リヤードフ（ロシア）、リスト
（ハンガリー）が入って多彩なプ
ログラムになり、お客様も楽しん



でくださった様です。

ポ文協らしさを出す方法には相
当苦しみましたが、演奏前のお話
とショパンの歌曲が入ることで、
他の演奏会とは少し違う方向性を
示せたのではないかと思っていま
す。

今回も、お手伝いくださいまし
たポ文協会員の皆様、お聞きくだ
さいました皆様、優れた演奏をし
てくださいました皆様に心から御
礼申し上げます。有難うございま
した。

ところで、私は札幌で三回、
ショパンのロンドを弾かせていた
だけ機会がありました。一度目の
パートナーは臨月。後日元気な男
の子が生まれましたものの、弾い
ている最中にどうにかなりそうで
不安いっぱい演奏でした。二度



目はポ文協の演奏会で、私自身
が椎間板ヘルニア発症の為演奏
不可能。三度目の今回は、パー
トナーが全身打撲の怪我で出演
不能。ロンドが呪われているの
か、ただ単に私との相性が悪い
のか。いずれにしても、演奏の
予定のある方は、くれぐれもお
気をつけ下さい。

来年はショパン生誕200年
の記念の年。充実した演奏会に
したく、間もなく準備を始めな
ければなりません。皆様の変わ
らぬお力添え、どうぞ宜しくお
願い申し上げます。



『シヨアー』のランズマンから見たアンジェイ・ワイダの『コルチャック先生』とアグニェシユカ・ホラントの『ヨーロッパ・ヨーロッパ』

小原雅俊

かつて、ゲットーに閉じ込められた200人の孤児たちとともにトレブリンカの絶滅収容所で殺されていったヤヌシユ・コルチャックを描いたアンジェイ・ワイダの一九九九年カンヌ映画祭出品作品「コルチャック先生」に対して、翌年、フランスのユダヤ系知識人の間で、「記憶の帝国主義」「キリスト教による私物化」といった批判がなされた。映画の若い少年の頭上に現れるキリスト教の図像である光輪とキリストの贖罪と天国の比喩と解された映画の最後のシーン（トレブリンカに向かう輸送列車からコルチャックと子供たちが乗った車両が離れ、スピードを落とし、草原で停まる。子供たちは表にダビデの星が、裏に四つ葉のクローバーが描かれた旗を掲げて、まるでピクニックに来たのでもあるかのように嬉々として露

のかかった草原に駆け出すのである。もちろん、字幕では彼らがどのようにして殺されていたかが伝えられる）が、ワイダがコルチャックをユダヤ人を救うキリスト教の聖者として描いたと非難される主たる根拠となったようである。映画『シヨアー』の監督クロード・ラズマンも *Somai's* の対談の中で、ワイダの『コルチャック先生』は「悪意ある反ユダヤ主義的な映画だ」と激しく非難した。ランズマンはここでも、ユダヤ人の絶滅には、最後のシーンで語られるような慰めはないこと、ユダヤ人全体の歴史を語るべきであって、ワイダのように個人的な物語を語り、それに普遍的価値を与えることはユダヤの歴史全体を歪めるものであるという主張を行っている。さらに、『コルチャック先生』のシナリオを担当したアグニェシユカ・ホラントについて、「嫌悪すべき」映画

『ヨーロッパ、ヨーロッパ』を作った人間と切り捨てる一方、ワイダはポーランド人のためのポーランド映画を作ったと言っているが、それならポーランドの中に留めておくべきで外に出す必要はないこと、コルチャックというポーランド化したユダヤ人はポーランド人にとってよいユダヤ人であるが、これからはワイダのおかげで、ユダヤ人にとってよいポーランド人になる、とも述べている。

ヤン・シチギェルのフランスでの『コルチャック先生』封切りの際の反応を紹介した記事によれば、この草原の寓意の中に「ワイダは焼却炉の存在を否定しているのだ」といった「歴史修正主義」の立場を見るような馬鹿げた解釈は

クロード・ランズマン



「コルチャック先生」

嘲笑されたし、観客の中に（哲学者、エッセイストの *Alain Finkielkraut* が言うように）「ユダヤ人は汽車で町の郊外にピクニックに出かけたのだと思つて映画館を出た者はまさかまい」が、ワイダの結末のメタファーはやはり「キリスト教による私物化のための操作」のひとつと見なされたのであった。さらに、シチギェルは、子供の頭上に現れる光輪についてはコルチャック自身が『ゲットー日記』の中で触れていることであり、「コルチャックはやはり、ポーランドのユダヤ人だったのだ」との感慨を付け加えている。

ランズマンが先の対談の中で激しい口調でポーランドには反ユダヤ主義はなかったと語つたというワイダに、ユダヤ人を助けたポー

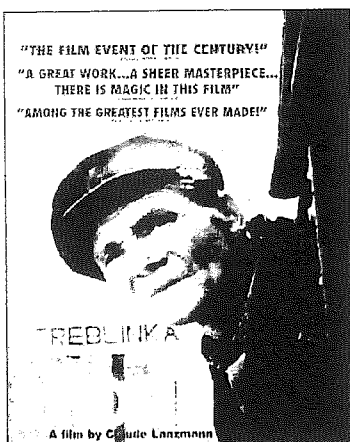
ランド人がいたことは確かだがそれはごくわずかだったというポーランド人に、さらにはユダヤ人を救えたであろうに救わなかったポーランド人を意味しているコルチャック、孤児院で子供たちにイディッシュ語を禁じ、ポーランド語しか話させなかったコルチャックのようなユダヤ人にも向けている非難と、彼が自らの映画『シヨア』で作り出したユダヤ民族の絶滅を証言するための方法、「表象不可能なホロコーストの表象」の問題が深く関わっていることは疑いない。にもかかわらず、ここで取り上げられた多くのことがらは、今ようやく、ホロコーストの残虐の歴史と分かちがたく結びついた問題として認識されるようになり、一方でそれに対する激しい反発、拒絶反応をも再生産しながら、研究が開始されたばかりであることも確かである。この対談で、ランズマンは、ワイダはコルチャックという英雄的なユダヤ人を描く一方、ユダヤ人の恐怖は放り出している、それがポーランド人の真実とユダヤ人の真実の完全なずれなのだと言っているが、ア

ウシユヴィツツ・ビルケナウがユダヤ人に取っては絶滅収容所であつたのに対して、ポーランド人に取っては強制収容所であつた事実が自明の事柄として語り出せたのもつい最近のことではないのも現実である。

ひとりの「コルチャック」が生まれてくるまでには、ポーランド人とそのポーランドで何世紀にもわたつてポーランド人とともに暮らしてきたポーランド・ユダヤ人の長い歴史がある。「西のユダヤ人が自分たちが暮らしていた国々の国民と融合することを願つたとすれば、東のユダヤ人は自らを別個の運命と別個の特質を持った別個の民族と感じていた」し、まわりのポーランド人からもそのように受け取られていた、とポーランドへの同化ユダヤ人である免疫学の権威であつたルドヴィク・ヒルシュフェルトは自伝『ひとつの生の物語』の中で書いている。「私はひとつ屋根の下で、二つの極端な社会構造が仲睦まじく、幸せに暮らすのを見てきた」。「祈りとともに目覚め、祈りとともに眠りにつく」日々を送つていた敬虔な

ユダヤ人たち、と一九八六年に出たエッセイ集『デザート溢れるクラコフスキエ・プシエドミエシチェ』の中に書いたのは、アウシユヴィツツ後のポーランド文学の担い手のひとり、同化ユダヤ人作家のアドルフ・ルドニツキであつた。ルドニツキが語っているのは、「絶滅」によつてポーランドの土地から、ポーランドの風景から完全に消え去り、今や記憶からも失われようとしている、主としてポーランドで、部分的には「絶滅」まで生きていた東方ユダヤ人の宗教共同体の人々のことである。言い換えれば、ポーランドの閉ざされたゲットーを生きたユダヤ人とは主としてこの敬虔なユダヤ人たちとポーランド社会の中

映画「シヨア」



に同化したユダヤ系ポーランド人、あるいは宗教共同体に根をもちながらポーランド文化の担い手になろうとしていた、いわば同化へと向かつていたユダヤ人であつたことも忘れてはなるまい。長い間、三国の分割占領下にあつたポーランドでは西欧とは異なり、ユダヤ人解放が法制的に実現するのは第一次世界大戦後の独立に伴つてのことである。ルドニツキが語るユダヤ人とは、すでに崩壊を遂げつつあつたとはいえ、地方のユダヤ人集住地シユテトルで西欧のユダヤ人とは異なる独特の暮らしを営んでいたポーランド・ユダヤ人のことである。確かに、ワイダの映画からは、こうしたワルシャワ・ゲットーに閉じ込められたユダヤ人がどのようなユダヤ人から成つていたかの説明は得られないだけに、ユダヤ人一般、以外そこに見ることが出来ないかもしれない。しかし、ワルシャワ・ゲットーに強制移住させられ、閉じ込められた人々ひとりひとりに、それまでの生活があり、人間関係があり、歴史があり、閉じ込められた後もお暫くは、それま

での習慣や価値観を携えて暮らすことになったのであった。閉ざされた過密な空間の中で、極度の飢えと病気に苦しみ、一切の希望を閉ざされ、ナチス・ドイツのテロに対する激しい恐怖におののきながら、トレブリンカへ移送されるまで、そしてその後も、驚くほどの抵抗の末に鎮圧されたワルシャワ・ゲットー蜂起のときまで、なおも生きたことも記憶に留められなければならぬ。そして、ポーランド人の無関心あるいは「悪意」によって生き残ることが出来なかった人々の生も、たとえ僅かであれ、ポーランド人の手助けで生き残ったゲットーのユダヤ人のその後の生もまた、ホロコーストの記憶の一部に留められなければならぬ。ポーランドの現代史の「語られない」部分を成功作も失敗作も含めて映像で表現してきたワイダにとつて、まさに「ポーランド人のために」このテーマに取り組む必要があったのに違いない。それは、最初に触れたイエジ・アンジェイエフスキ原作のワルシャワ・ゲットー蜂起の時の堀の外側のポーランド人のユダヤ人

に対する関係を描いた『聖週間』をワイダがまもなく映像化したことから推測できよう。この映画もまた、時代に敏感なワイダの覚悟の中に反ユダヤ主義の非難を受けかねない危うさを蔵しているかもしれないし、あるいは自らの反ユダヤ主義を免罪しようとするポーランド人のための映画だとの非難が起こるかも知れないにしてもである。

(この原稿は2001年十一月に大東文化大学での講義資料としてまとめたものである。ここで取り上げたいくつかの論点がこの先どのような展開を見せるかに興味があったためしばらく発表を控えていたものである。ユダヤ人とポーランド人の関係の歴史については今や膨大な文献があり、整理するだけでも容易でないが、機会を見て紹介してみたいものである)

この場面はコルチャックが子供たちに死に備えさせるためにゲッソーの中の孤児院で上演させたタゴールの戯曲『郵便配達人』の翻

案である。

- 小原雅俊 「ポーランドのユダヤ人」 『コルチャック先生を觀て』、『図書』、1991.11 岩波書店。ここでの引用はほとんどが次のヤン・シチギェルの記事による。Jan Szygiel, *Swiety bez aureoli: Polityka, 26.1.1991 B*
- Sommaire, Numéro 1367, du 17 au 23 janvier 1991, pp. 70 - 73. 寺門祐子訳。
- Ludwik Hirszfeld, *Historia Jednego Zycia, Spoldziefnia Wydawnicza Czytelnik, Wieszawa 1946*・小原雅俊 『ポーランドのユダヤ人』 『大東文化』 1989.12。
- Adolf Rudnicki, *Krakowskie Przedmiecnie i pelne deserów, Panstwowy Instytut Wydawniczy, Warszawa 1986*・小原雅俊 『ポーランドのユダヤ人』 『大東文化』 1989.12。

会費の納入はお済みですか？

2009年度 (2008年10月～2009年9月分)

当会は、皆様からの年会費によって運営されています。上記の年度分の会費の納入を宜しくお願いいたします。

編集委員会

栗原朋友子・越野剛・小林美保・

佐光伸一・鳴神雅史

ラファウ・ジエプカ

Tel/Fax 011-790-8610

北海道ポーランド文化協会

普通会員 (年額) 3,000円

維持会員 (年額1口) 5,000円

学生会員 (年額) 1,500円

《会費振込銀行口座》

北海道ポーランド文化協会

事務局長佐光伸一

《郵便振替口座》

02740 - 5 - 19735

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 65 号 (2009 年 8 月)

目 次

薄井豊美「北海道ポーランド文化協会コンサート [シヨパン、リヤードフなどを中心に] を
終えて」 [2009.5.29] 1

小原雅俊「『ショアー』のランズマンから見たアンジェイ・ワイダの『コルチャック先生』
とアグニエシュカ・ホラントの『ヨーロッパ・ヨーロッパ』 [僕を愛したふたつの国]」 2